

盤洲干潟(木更津海岸)の観察

報告者：大野幸正（東京湾生き生き研究会）

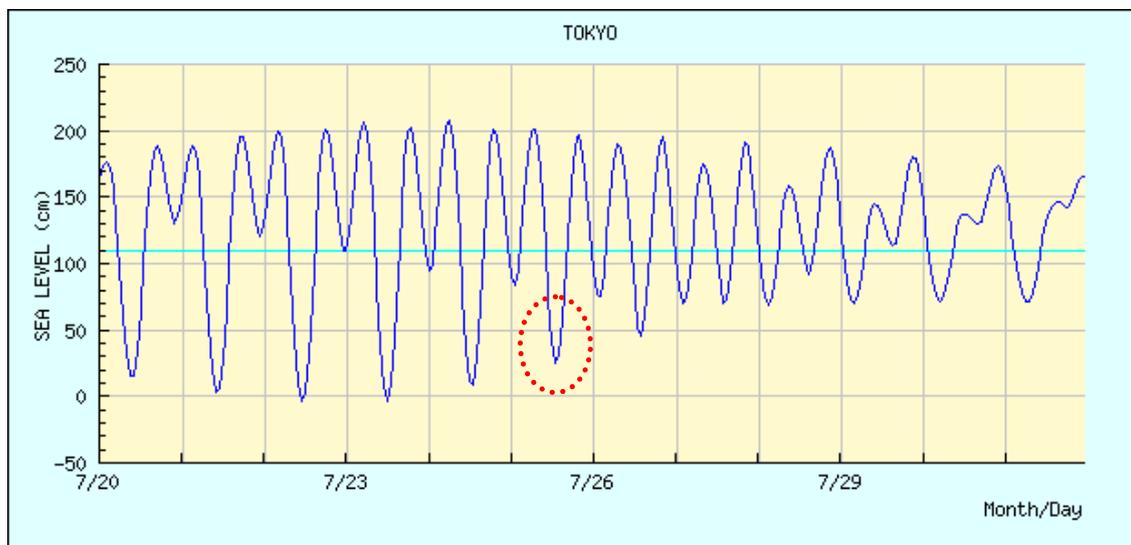
日時：2009年7月25日（土）10:30-14:30

場所：盤洲干潟（木更津漁協の潮干狩り場）

観察したのは下図の赤い点線の範囲内の木更津漁協が運営する潮干狩り場です。岸から沖方向に、熊手や手網を用いる他に、所々スコップで砂泥を掘り、篩いがけして小型の干潟生物を集めて観察し、状況をデジタルカメラに記録しました。当日は、13:14が最干潮時刻（推算潮位 24cm）で、晴れてはありましたが、朝から南寄りの風が強い日でした。



観察の範囲



推算潮位（気象庁潮位表：東京）

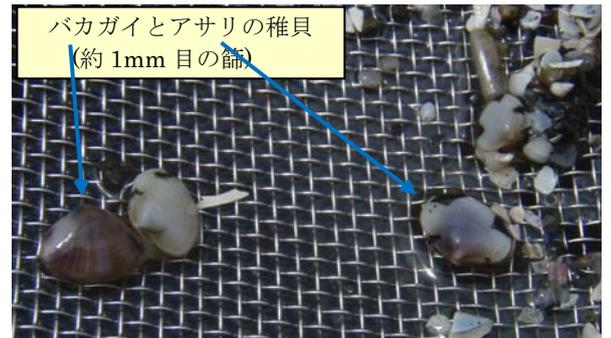
【潮干狩り場】

木更津駅から海に向かって真っすぐの下ると木更津港に着きます。東京湾横断道路が出来るまでは、ここと川崎港を行き来するカーフェリーが就航いたしておりました。目指す潮干狩り場はこの港の北側にあり、フェリー航路を越えて行くために大きな赤い橋を徒歩で渡ります。下の写真は帰りがけに橋の上から撮った航路と干潟の写真です。



【岸寄り】

着いた時点では、岸よりの一部しか干上がっていませんでした。そのあたりの潮だまりで手網を用いてガサガサやったら、アラムシロガイが大量に、ハゼ類の稚魚とマメコブシガニ、ケフサイソガニが少々捕れました。5月の金田海岸の時には、ウミニナ類が多かったのですがここでは姿を見せず、ハゼ類の稚魚は小ぶりで少ないという状況でした。ビ類も入りませんでした。目の細かい篩には、バカガイとアサリの稚貝が結構いました。エ



【砂の中】

今回は、熊手を用いた採集に力点を置いたために、残念なことに、スコップで掘った砂泥の中の写真がほとんどありません。印象としては、嫌気状態の泥の場所が少ないこと、その割にゴカイなどの多毛類が少ないこと、アナジャコが穴はあったけれども姿を見ることが出来なかったことなどがあります。

【沖の方】

「潮干狩りにおいでの皆様、潮も引いてきました。沖の方が大きなアサリがたくさんいます。」というアナウンスがあり、「沖の方」を楽しみにして歩きました。岸から 400~500m のあたりでは、一面にコアマモが繁茂しておりました。所々の砂地で掘ると、殻の模様がきれいなアサリが捕れました。組合の人によると、他所からのアサリは放流していないとのことでした。

バカガイも多くはないものの小ぶりのものが混じっておりました。もっと沖まで行けば多くいたのかもしれませんが、さほど大きく引き潮時ではなかったもので、無理には沖を目指しませんでした。

貝類の稚貝はここでも結構多く、岸寄りと同様に砂泥の表面付近に多くいました。マテガイの稚貝も結構多くいました。



ケフサイソガニがコアマモの上に出てくるという懐かしい姿（1匹だけでしたが……。）にも出会いました。



【貝類のこと】

全体を通じて確認された貝類は、二枚貝の仲間であさり、シオフキガイ、バカガイ、マテガイ、カガミガイ、ホトトギスガイ、巻貝の仲間であラムシロガイ、ツメタガイ、アカニシ、キサゴ類、バイの仲間？です。全般に量が少ない状況で、商品価値が低いシオフキガイがあさり、バカガイよりも少ないことが不思議でした。船橋の海浜公園でよく見かけたホンビノスガイやアカガイに似たサルボウガイは見かけませんでした。



3年前に来た時と比べると、あさりの量は少ないようですが、嫌気状態の砂泥の場所が少ないためでしょうか、貝の殻の色は綺麗なものが多かったです。蝶つがいがつながったまま開いた状態のあさりも結構多く、「なぜ死んだのか、稚貝がいるのに育つことができないのか」など、大変に気がかりでした。今後、さらに研究会メンバーとともに考えていきたい問題点です。

潮干狩り場では、元気な子供たちが夏の装束で駆けまわっておりました。流石に5・6月の潮干狩り場とは趣が異なります。「おじさんたち、どう？」と声をかけられました。



【その他ご紹介写真】

◇アラムシロガイ(1cm程度)とハゼくん(左)



不思議な生き物1：何かの卵のう？(右)



◇不思議な生き物2・・・ホトトギスガイ

以前から、干潟では漁師の人々から嫌われておりました。ホトトギスガイは、自分で作った糸状のもの(足糸)で絡まり合い、マット状に繁殖するもので、貝類が砂泥にもぐり込めなくなるために、アサリなど有用な水産貝類の繁殖の場所が狭められるとして嫌われるのです。そこにいる以上は、干潟の何か(生息環境の創出、物質循環など)を担っているかと思うのですが・・・。



◇オサガニの仲間 (ヤマトオサガニくん?それとも、オサガニくん?)

